

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	世界恐慌期インドネシアのバティック産業
Author(s)	赤崎, 雄一
Citation	史学研究 , 314 : 1 - 20
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055732
Right	
Relation	



世界恐慌期インドネシアのバティック産業

赤 崎 雄 一

はじめに

インドネシアのバティック（ロウケツ染め）産業は、丁字入りたばこ産業と共に、国を代表する「民族産業」として理解されている。経済面ではオランダ植民地期から現代に至るまでインドネシア経済を支え、文化面では二〇〇九年、ユネスコにより世界無形文化遺産に認定された¹⁾。

バティックとはインドネシアのジャワ島で生産されるロウケツ染め布地のことであり、日本ではジャワ更紗と呼ばれている。元来、バティック batik とはジャワ語で「点」、「点をうつ」、「印をつける」という意味であり、そこから派生した語と言われる [Anon. 1917:192]。

中部ジャワ地方におけるバティックの基本的な製作過程は以下の通りである。

① 綿布の下処理…綿布には晒綿布のキャンプリックを使用する。水洗い、灰汁と油に浸す (ngloror) などの行程の後、乾燥、裁断、糊付けを行い、表面を滑らかにするため木製ハンマーで叩く (ngemplong)。

② ロウ置き…鉛筆で下書きが施された綿布の上にロウを置く。片面のロウによる模様描き (ngengreng) の後、反対側にも同じ模様描きを行う。その後、両面とも染めたい部分をロウでふせる (nembok)。ロウ置きには、溶かしたロウを細い管に通して出す道具チャンティン canting、もしくは何枚もの銅板を組み合わせてつくった模様ロウをつけたスタンプ、チャップ cap が使用される。

③ 青（藍）染め…藍の入った容器の中に浸す (medel)。

④ 脱ロウ…一部のロウを削り落とす (ngeroak)。これは茶

に染める部分になる。

⑤ ロウ置き…青色のまま残したい部分に再びロウ置きを行
う (mbironi)。

⑥ 茶 (ソガ) 染め (njoga)

⑦ 脱ロウ…布を煮沸する (mbabar)。ロウが溶け、描かれ
た模様が見れる。

⑧ 仕上げ…洗い、灰汁に浸す、糊付け、乾燥

こうして製作されたバティックは、腰に巻く筒状のサロン
sarong、腰に巻き付ける布のカイン・パンジャン kain
panjang、女性用肩掛けのスレندان selendang、女性用上
衣であるクンベン kemben、男性の頭につけるカイン・クパ
ラ kain kepala などに使用される [Kretschmer 1941: 187-
188]。

拙稿「植民地期インドネシアのバティック産業の成長」〔赤
崎2020〕では、一九世紀中頃から二〇世紀初めにかけてのバ
ティック産業の成長について検討し、以下のことを明らかに
した。バティック産業は世界市場の影響を受けながら新たな
製造方法の導入、海外から輸入された原料の使用などの変革
を進め、この地域の重要な産業へと成長した。第一次世界大
戦時に大きな危機を迎えたが、不況下にあってもジャワに住
む人々の生活を支える重要な産業であり続けた。特に主要な
生産地であるスラカルタ Surakarta では、市場を一部奪われ、
生産量を減らしながらも、伝統的な製造方法による高品質な
バティックの製造も安定的に継続し、一定のシェアを守り続

けた。

この続きにあたる本稿では、世界恐慌期の激変する世界経
済において、進出を加速させる日本製綿布に対処するためオ
ランダと植民地政庁が出した輸入制限令の影響を受けなが
ら、バティック産業がどのように発展を続けたのかという問
題を主要な生産地であるスラカルタを中心に検討したい。

1. 一九三〇年代前半のバティック産業の不況

1. 世界恐慌の影響

一九二九年、ニューヨークのウォール街での株価大暴落に
始まる世界恐慌は、一次産品輸出に依存していた現在のイン
ドネシア、蘭領東インド経済にも大きな影響を与えた。

一九二九年、スマトラ、ボルネオでのゴム、森林生産物など
輸出用作物の価格が暴落し、当該地域の住民の収入は減少し
た。ジャワにおいても不況に伴う農産物価格の低下は深刻な
問題になった。

一九三〇年当時、蘭領東インドで現地資本による代表的な
産業として成長していたバティック産業は、バタヴィア
Batavia、チルボン Cirebon など西部ジャワで一七五四社、
スラカルタ、ジョクジャカルタ Jogyakarta、プカロンガン
Pekalongan など中部ジャワで二三四七社、トゥルンアグン
Tulungagung、ポノロゴ Ponorogo など東部ジャワで二八〇
社、合計四三八四社が操業し、労働者約一万七千人を雇用し

表1 地域別バティック企業数（1930年）

	現地人	華人	アラブ人	西洋人	合計
西部ジャワ	1472	285			1757
中部ジャワ	1804	418	113	12	2347
東部ジャワ	239	24	17		280
ジャワ全体	3515	727	130	12	4384

[Angelino 1931 : 173]

表2 バティック業における綿布の消費量（1000ヤード）

年度	キャンブリック	グレイ	合計
1926	108440	14162	122602
1927	115742	20634	136376
1928	120160	15500	135660
1929	122841	19000	141841
1930	103119	14990	118109
1931	89082	19011	108093
1932	87548	25394	112942
1933	100548	27449	127997
1934	85549	38918	124467
1935	68746	31978	100724
1936	100800	32400	133200
1937	129900	28800	158700
1938	96200	23800	120000

[IV 1939 : 168]

ていた。バティック産業の状況は住民の家計を支配する農業の結果に密接に関係するといわれる。住民の購買力の低下がバティック販売量の減少につながり、一九三二年、三二年の原料綿布の消費量は二九年の八三%、七六%にまで減少し

た。特に、バタヴィア、プカロンガンなど、通常、ジャワ島以外の国や地域に大量に販売していた生産地が大きな打撃を受けた。バタヴィアはかつて年間一千万ギルダのバティックをジャワ島外に移出していたが、一九三二年はわずか数千万ギルダと落ちた [Kretschmer 1941 : 194] [IV 1933 : 146] [IV 1939 : 168]。

王宮由来の伝統的な色彩とモチーフを使用し、バティック産業の中心地として知られる王侯領スラカルタ、ジョクジャカルタでも不況の影響を強く受けた。住民の購買力の低下により安価なバティックへの需要が高まり、他の生産地との競争が激化したからである。この不況期、唯一生産量を伸ばした産地がポノロゴである。ポノロゴでは、ジャワ人企業が、原料として晒綿布キャンブリックではなく低品質のグレイと呼ばれる未晒綿布を使用し、周辺の村の賃金労働者によるチャップを多用したバティックを生産していた。染料についてもスラカルタで茶染めに使用されるソガ染料は使用せず、異なる植物染料 *Kened* を使用し、わずか二日間で染色していた。それが八〜一四日間が必要な「ソガ染め」という名で各地に販売され、安価であるため人気になった。ただ、すぐに変色するという欠点があった。このポノロゴ産バティックは東部ジャワから中部ジャワに拡大し、スラカルタ、ジョクジャカルタ内にまで流通するようになった。スラカルタで生産される平均価格二ギルダの晒綿布キャンブリックを使用したバティックが、〇・六ギルダ以下のポノロゴ産

未晒綿布グレイのバティックに市場で敗れるようになった
[IV 1932: 142] [Angelino 1931: 77-80] [Volksraad 1935: 36
: 1779]。

一九三〇年代前半、バティック産業の景気後退の原因として、服装についての流行の変化も考えられる。男性、女性共に腰巻き布として使用するサロン、カイン・パンジャンには従来バティックが用いられてきた。しかし、西欧文化に接する機会が多い西部ジャワのプランテーションで働く住民などについては、サロンと頭巾からパンツと帽子への移行が進んでいた。また、都市部、特に東部ジャワの都市、都市周辺部ではバティックではなく格子柄の縞サロンを使用する男性が増加した。さらに安価な日本製縞サロンの輸入が増加したことがそれに拍車をかけた。[台湾総督官房外事課 1935: 26] [Soerachman 1933]。

二．日本製綿布の急拡大

この時期、不況に苦しむバティック産業で原料として積極的に使用されるようになったのが日本製綿布である。一九三〇年代初頭、日本の綿布輸出において蘭領東インドは、アメリカ、満州、インドに次いで第四位の重要市場になった。第一次世界大戦期より三井物産など日本の主要商社は蘭領東インド貿易に進出し、綿製品の売り込みを行っていた。未晒綿布については、一九一八年にオランダ、イギリスを抜いて日本が輸出国一位となり、二〇年代末には八〇%以上のシェア

を得るようになった。⁽¹⁾一九三〇年代になると銀行、大手商社、財閥系企業などが東インド主要都市に支店、営業所を持つようになり、日本製品の販売網が強化された。それに加え、一九三二年一二月、日本で金輸出再禁止の措置がなされたことにより円が低落し、一九三一年百円につき一二ギルダーだったレートが、三二年には六九ギルダーとなった。こうして一九三二年以降安価になった日本製綿製品が急速にかつ大量に蘭領東インド市場に流入した。

表2から、三〇年代前半、日本製が圧倒的なシェアを占める未晒綿布グレイの使用がさらに増加したことがわかる。その中でもグレイ・シャーツング gray shirting、つまり三巾金巾が二〇年代から並級キャンブリックの代用品として低品質のバティックで使用されていた。また輸入綿布全体の三〇%ほどを占める最重要商品、晒綿布でも、日本製晒綿布の輸入が一九二九年から増加し、一九三三年にはオランダ製を抜いてそのシェアは七七・三%となった。晒綿布の中でもバティック原料として使用されるキャンブリックについては日本製のシェアが八一%になった。これらはバティックの主要な生産地であるスラカルタとジョクジャカルタに最も多く供給されていた [村山1986: 88] [杉山1990: 95-98] [増田: 後藤1977: 132] [大阪市役所産業部調査課1934: 1]。

統計上、キャンブリックは一平方インチの糸数により次の四種類に分類される。①高級 primissima が五六本以上、②上級 prima が四六一五五本、③中級が三六一四五本、④並

表3 ジャワのキャンブリックの輸入量（1000ヤード）

年度	輸入量合計	オランダ		日本	
		数量	割合	数量	割合
1929	122840	101178	82.3%	4367	3.6%
1930	103120	89212	86.4%	7439	7.2%
1931	89089	73983	83 %	12365	13.9%
1932	87550	53389	60.9%	31282	35.8%
1933	100657	16772	16.7%	82327	82.3%
1934	86086	30523	35.4%	54251	63 %
1935	69013	41938	60.9%	26301	38.1%

[龍寶 1936 : 521]

級が三五本以下である。高級キャンブリックはオランダ製、イギリス製が独占状態を続けていたが、上級、中級、並級では日本製が追い越し、一九三二年に八〇%以上を占めるようになった。特にスラカルタでバティック原料として使用される上級キャンブリックは、恐

慌期でありながら、輸入量が一九二七年の四六二四・八万ヤードから一九三三年に四九六一・七万ヤードへと増加し、輸入キャンブリック全体での割合も一九二七年の三九・七%から三三年に四九・三%へと増加した。その原因はもちろんこのクラスの日製輸入が急増したためである。その一方で、並級キャンブリックの輸入量は一九三二年から三四年にかけて減少した。これは、より安価な日本製未晒綿布の輸入が急増したこと、さらに、上のクラスである上級、中級キャンブリックの価格が日本製の急増により低下したことで、

表4 ジャワ・マドゥラのキャンブリック輸入量（1000ヤード）

年度	並級		中級		上級		高級		合計
	数量	割合	数量	割合	数量	割合	数量	割合	
1927	11504	9.8%	51607	43.9%	46248	39.3%	8300	7.1%	117659
1932	10317	11.8%	30591	35.0%	44356	50.8%	2062	2.4%	87326
1933	8435	8.4%	40383	40.2%	49617	49.3%	2113	2.1%	100548
1934	5079	5.9%	43535	50.9%	34199	40.0%	2735	3.2%	85548
1935	5821	8.5%	49158	71.5%	12031	17.5%	1738	2.5%	68748
1936	11960	17.9%	43228	64.8%	10649	16.0%	914	1.4%	66751
1937	32016	22.5%	88953	62.6%	18363	12.9%	2713	1.9%	142045
1938	9039	7.9%	84642	73.6%	17905	15.6%	3457	3.0%	115043

[Saroso 1951 : 173]

その間に位置する並級の需要が減少したためと考えられる。また、三〇年代前半の不況時、未晒綿布を使用した安価なバティックが流行したことを述べたが、日本製の流入が価格を下げたこともあり、三四年までは上級キャンブリックを使用したバティックの需要がなお高かったことも表4から確認できる [Saroso 1951 : 173-176]。日本製綿布の急拡大は蘭領東インドのバティック産業の需要を向上させることにつながったが、日本製綿製品が他の東南アジア諸国にも拡大したことは、バティック産業にとって負の側面にもなる。世界恐慌前、プカロンガンとバタヴィアだけ

で月に二百萬ギルダのバティックが海外に輸出されていた。輸出の大部分はシンガポールに向かい、そこからさらにタイに向かうものもあった。そのタイでは日本産イミテーションバティックが大量に流入するようになり、蘭領東インド産バティックと激しい競争になった。蘭領東インドからのバティックの輸出は一九三二年から三五年にかけて減少し、特にタイへの輸出は、一九三二年に五萬七千六百七十七キロ、三三年に五〇萬三三三二キロ、三四年に四七萬八三三キロ、三五年に三七萬七三三〇キロと年々後退している

[Soerachman 1933] [IV 1936: 140]。

II. 輸入制限令とバティック産業

一. 輸入制限令

一九三二年以降、日本製品が蘭領東インド市場に急増したことで、オランダ政府は保護貿易の傾向を強めるようになった。当時、オランダ本国で生産された輸出用綿布の約五割、特に晒綿布については約八割が蘭領東インドに向けられており、トゥエンテを中心とするオランダ綿業にとってこの植民地は存続する上で欠かすことのできない市場であった。しかし、日本製晒綿布の拡大によってジャワにおけるオランダ製晒綿布のシェアは三一年の八三%から、三二年の六一%、三三年の一七%へと急落した。危機感を抱いたオランダ本国の綿業者は、一九三二年一月、緊急手段として、綿布輸入に

関して産出国の比率を定める一時的割当制度の実施を蘭領東インド総督に陳情し、六月にはオランダ植民大臣にも陳情した。オランダの紡織工四万人からも失業者が増加していると植民地政庁に訴えがあった [南洋協会 1933: 19] [杉山 1990: 100]。

一九三三年九月、非常時輸入制限令が公布された。世界恐慌以来の輸入における異常な変化に対して国内産業と市場を保護するため、蘭領東インド政庁に輸入制限の施行権限を付与するものである。一二月、日蘭両国の綿業者による民間会商がハーグで行われ、この問題について民間による交渉がなされたが、三四年二月、非常時輸入制限令に基づき、サロン輸入制限令が發布され、サロン類とその原料となる綿織物の綿布二種の輸入が制限されることになった。輸入総量を日本製品が増加する以前の一九三〇年輸入量の八〇%に制限し、その中でオランダ製品に二七・六%の優先的割当が与えられる内容となっている。輸入業者には輸入許可証の取得が必要とされ、この取得要件についても一九三〇年が基準となったために日本人輸入商は大きな制約を受けることになった [東亜研究所 1933: 5260] [村山 1986: 91-95]。

日蘭両国にとって最大の懸案事項である晒綿布についても、三四年二月に晒綿布輸入制限令が公布された。同年三月から一二月までの輸入量を限定し、オランダ製の優先的割当を晒綿布全体については五〇%、バティック原料として使用するキャンブリックについては六一%とし、それ以外の枠内

だけに日本製品の輸入を認めるものである。また、輸入を行うには輸入許可証が必要となり、その取得について、①一九三四年一月一日現在、バタヴィア輸入業者組合の組合人にしてかつ蘭領東インド内にある公認の欧州人商業組合に十個以上加入しているもの、②①の九個以下の組合に加入するもの、③①の組合に加入していなかったもの、に区分され、輸入許可数量の六割が①の資格、三割が②の資格、一割が③の資格に付与されるとした〔南洋協会1934b: 3841〕。

バタヴィアでは、一九三三年に日本人輸出入卸業者一六社、小売商四七社、その他の台湾銀行、横浜正金銀行など七〇社が参加してバタヴィア商業協会が設立されていた。しかし、上記の条件では、三井物産のみが②に属し、他は③に該当した。このように、この輸入制限令の目的は、日本製晒綿布の輸入と日系輸入業者の活動を制限することで、オランダ綿工業を保護し、オランダ系輸入業者に日本製を含めた取引機会を拡大させることにあった。一九三三年の晒綿布輸入における取引の実績は日本商社四八%、オランダ商社五二%であったが、この制限令によって日本商社の取引が二二%、オランダ商社が七八%になると予想されていた〔杉山1990: 97-98〕〔籠谷2000: 349-353〕〔村山1986: 100-101〕。

二．日蘭会商

一九三四年六月、日蘭両国は民間交渉に続き、政府間の貿易交渉をバタヴィアで開始した。日本側の代表である長岡春

一は到着後すぐに声明を出し、日本製品が質と価格の両面から蘭領東インド住民の生活必需品への需要を満たすことでの地の住民に歓迎されていると訴え、両国の利益を損なう輸入制限令に遺憾の意を表明した〔Algemeen handelsblad Nederlandsch-Indië: 04-06-1934〕。植民地の住民に訴えることとで、オランダ本国と植民地の世論を分断させ、交渉を有利に運ぼうとする意図があったと考えられる。

実際、日蘭会商の直前、スラカルタ、ジョクジャカルタ、プカロンガンのバティック企業代表団が輸入制限令について東インド評議会副会長メイエル・ランネフト Meijer Rannett と会談していた。企業代表団は政治的な理由で日本製綿布の輸入を制限することに反対の意を示し、日本製を制限し、オランダ製の輸入を推進することで、晒綿布の市場価格が高騰していると訴えたという〔GKBI 2009: 48〕。

六月八日から始まった交渉では、日本製綿製品に対する制限、綿製品を取扱う業者の割当、日本のジャワ糖の輸入に関する問題が主な議題となり、一月二一日まで行われた。互いに歩み寄りをみせた結果、①輸入総量の基準を三三年の実績から二割減すること、②輸入商社の資格規定を緩和して「欧州人商業組合に加入しているか否か」を問題としないこと、③日本人貿易商社への割当を蘭印総輸入量の二五%にする、と、という合意がなされた。

その後、三七年四月、日蘭通商仮協定つまり石沢・ハルト協定が成立し、これまでに合意された内容が追認され、日本

がジャワ糖など蘭領東インドの商品の輸入を促進することも定められた〔籠谷2000：374-378；389-390〕。

三・フォルクスラートの意見

日本製綿製品に対する輸入制限令は植民地社会でどのように受け止められていたのであろうか。蘭領東インドで発行されている一部の新聞は、日蘭会商以前から、関税の問題はオランダ本国の利益と蘭領東インド生産者の利益の二つの立場から検討すべきであり、オランダ本国の綿産業を救済するため蘭領東インドが一方的に不利益を被ることに反対していた〔越田1933：67〕〔Soerabajasch handelsblad 25-06-1932〕〔姉齒1932：34〕。

このようなメディアの動きに呼応し、植民地総督の諮問会議であるフォルクスラート Volksraad でも現地人議員を中心に輸入制限令のバティック産業への影響について様々な質問、意見が出された。

ウィウオホ Wiwoho Purbohadijojo 議員は、晒綿布輸入制限令が、バティック産業を後退させ、オランダのトゥエンテの労働者救済のために植民地のバティック労働者が犠牲になっていると指摘した。

「晒綿布輸入制限令はバティック産業の価値を大幅に低下させた。バティック業界がすでに恐慌に苦しんでいる中、原材料に対する輸入制限令は不安定な状況にある。」

の産業に最終的な一撃を与えている。」

「様々なバティック企業がすでに閉鎖されており、結果的に失業者が政府の輸入制限の方策によってかなり増加している。明らかにこれはトゥエンテの労働者の支援を意図的に行ったものであり、それについてはおそらく成功したが、その結果、ここで新しい失業者を生んでいる。」〔Volksraad 1934-35：188〕

スカルジヨ Sukardjo Wiryo Pranoto 議員、カンチ Ignatius Joseph Kasimo 議員、スロン R. Pandi Soeroso 議員は、蘭領東インド住民の生活を守るため晒綿布など日本製への輸入制限を見直すよう提案した。

「晒綿布、色綿布のサロン、陶器など、住民の生活必需品に対する輸入制限令において、その輸入業者割当の見直しと新しい輸入業者がより大きな割当を与えられるようにすること」〔Volksraad 1934-35：1012〕

このように、フォルクスラートの現地人議員からはこの政策が蘭領東インド経済を実際に守るためのものかという疑問が提示された。政庁、オランダ系議員はこれらの意見に対して異議を述べていたが、現地人議員を納得させるものではなかった。また、この論争から、オランダ綿産業、オランダ系

輸入業者、蘭領東インドのバティック産業間に輸入制限令をめぐり利害対立が存在し、それが問題にされていることが確認できる。

四. バティック産業への影響

一九三四年三月一日に晒綿布輸入制限令が施行され、大量に流入していた安価な日本製晒綿布の輸入は減少し、オランダ製晒綿布の輸入が増加した。表4が示すようにキャンブリック全体の輸入量は三三年の一億五千万ヤードから三五年の六八七五万ヤードと大幅に減少し、スラカルタのバティック産業で多く使用されていた日本製上級キャンブリックについては三五年に前年度比五二％に減少した。その影響を受け晒綿価格は上昇した。表5から三四年に晒綿布の価格が値上がりしたことがわかるが、これは特に日本製晒綿布の並級、中級の価格が上昇したためである。卸売り価格の三四年一月と三五年一月を比較すると、並級が二二％、中級が三四％上昇している [Saroso 1951 : 174,193]。

このようにバティック業者はこれまで以上に高い金額で綿布を購入することを強いられるようになったが、売り上げの落ち込みが懸念されるため、原料値上がり分を価格に反映させることができなかった。このことで使用する原料綿布の種類に変化が生まれた。表4にあるように、一九三〇年代初め、上級キャンブリックの割合が高かったが、三五年に中級キャンブリックの割合が急増し、七二％になった。また、キャン

表5 晒綿布キャンブリックの卸売り価格（ギルダー）

種類	商品名	インチ×ヤード	生産地	1934.1	1935.1	1936.1	1936.9	1937.1	1937.7	1938
並級	Payong Merah	40×48	日本	4.3	5.25	5.25	4.85	5.35	6.58	6.58
中級	Palu Biru	40×48	日本		6	6.2	6.63	6.45	7.75	7.75
	Bintang Wungu	40×48	オランダ	6.5	6.75	6.76	6.18	6.8	8.03	8.03
	Borak Biroe	40×16.5	日本	1.81	2.43	2.43	2.25	2.45	2.93	2.93
	van Heek II	40×16.5	オランダ	2.4	2.43	2.43	2.23	2.45	2.9	2.9
上級	Burung Biru	42×17.5	日本	3.05	3.1	3.1	2.8	3.08	3.68	3.68
	Kroon Merah/Biru	42×17.5	オランダ	3	2.98	2.98	2.8	3.08	3.68	3.68
高級	Cent Merah	42×17.5	オランダ	4.4	4.7	4.65	4.42	4.88	5.65	5.65

[Saroso 1951 : 192]

ブリックではなく未晒綿布を使用して安価なバティックを製造する企業がさらに拡大した。これまでも未晒綿布は低品質のバティックで使用されていたが、三三年の二七四五万ヤードから三四年の三八九二万ヤードへと消費量が急増していることに注目できる。この九五％以上が日本製である。未晒綿布は従来、国内よりもシンガポールなどへの輸出向けとして、バタヴィア周辺のバティック企業で多く使用されていたが、晒綿布の輸入制限令以降、中部ジャワのバティック企業でも需要が増加し、ジャワ島中部にあるスマラン港からの輸入量が増加した。しかし、この時期、輸入が急増した日本製未晒綿布についても、一九三五年

一月末から未晒綿布輸入制限令が公布されることになった。日本からの輸送が年度当初一時期滞ったこともあり、三五年の消費量は三一九八万ヤードと一転減少した。価格については、制限令に伴い以前の「コーデイ」(20枚)三・五ギルダーから四・一ギルダーに上昇した⁽²⁾ [V. 1936: 140] [Saroso 1961: 192, 195]。

このように輸入制限令は晒綿布価格を上昇させ、パティック企業が未晒綿布の使用を増加させたため、オランダ製晒綿布の需要を回復させることはできなかった。その後、オランダ本国、植民地政庁はオランダ製晒綿布の輸入拡大のため主に日本製である未晒綿布にも制限令を発した。これらの政策決定に綿布を購入するパティック産業への配慮は感じられない。パティック産業は原料綿布をこれまでの量、これまでの価格で安定的に購入することが不可能になった。この状況で、企業は製造コストを下げるために労賃をさげることで対応しようとした。技術の高い一部のチャップ労働者を除いて、多くの労働者が賃金の減少、もしくは仕事の機会を失うことになった [台湾総督官房外事課1935: 291-292] [V. 1936: 140] [Anon 1936: 758]。

III. 一九三〇年代後半のパティック産業の回復

一. パティック産業救援策

輸入制限令実施後のパティック産業の困窮した状況につい

ては、フォルクスラートでもたびたび議題とされ、植民地政庁はその対応に迫られることになった。一九三六年になってようやく政庁は、高騰したキャンブリックの価格を適切な価格に引き下げる目的で追加予算八万三千ギルダーを支出するというパティック産業救援策を提示した。この法案についての政庁の説明は次の通りである。

不況で困難に陥ったパティック産業に、キャンブリックの価格が高騰したことは更に過大な負担をもたらした。特にキャンブリックを使用するパティック企業は安価な未晒綿布のパティックに市場を奪われている。早急にパティック企業を救う必要があるが、会計処理上問題があるパティック企業に直接、政庁から補償金を与えることは現実的でない。そのため、オランダ製キャンブリックの販売価格に公定価格を定め、それを購入する輸入業者に対して購入価格と販売する公定価格との差額を政庁が支出する。輸入業者には全てのキャンブリックを固定価格で販売する義務が生じる。実施は在庫分を含めて一九三六年三月一日からとする [Volkraad 1935-36: onderwerp125]。

この法案に先立って、当事者となるオランダ系綿布輸入業者は業者間の連携組織を結成していた。スマランのキャンブリック協定 *cambrics-convenant*、バクヴィアのグレイ協定 *grays-convenant* である。業者間で激しい競争を行っていたが、顧客の情報を提供するなど協力関係を維持していた。これらの組織では取引する業者を、①大規模な中間業者(主に

華人商人）、②小規模な中間業者（大規模なバティック企業も含む）、③小規模なバティック企業、にグループ分けし、綿布の販売価格一ブロック毎に二―一五セントほどの差をつけていた。しかし、今回の公定価格を定める法案に対して、組織に加盟している輸入業者は全面的に協力する意思を示した [Saroso 1951 : 183-184] [De locomotief 17-02-1936]。

一九三六年二月二七日、フォルクスラートにおいて、このバティック産業への救済案について議論がなされた。プラウト R. Prawoto Sumodilogo 議員は、この案がバティック企業の救済というよりも晒綿布を輸出するオランダ綿業者の利益を優先するものであると批判し、東インドの人々のためには安価な未晒綿布で製造するバティック業者への救援策を考える必要があると指摘した。

「私はオランダ政府が未晒綿布産出国との戦いへのプレゼントとして八一万三千ギルダーをトゥエンテに与えることに同意しました。しかし、この措置がバティック企業への特別な支援措置と見なされるならば、私は抗議したいと思えます。」 [Volksraad 1935-36 : 1778]

「政府にはキャンペーンブティック製造企業よりもバティック製造業者を支援してもらいたい。未晒綿布で製造するバティック企業が利益を上げれば、貧しい人々にその製品を安く提供できる。キャンペーンブティックで製造するバティッ

ク企業は高価な製品を買う余裕のある裕福な人々の需要に対応してゐる。」 [Volksraad 1935-36 : 1779]

カシモ議員は、今後も資金面でバティック企業を支援する必要があると訴え、バティック企業が輸入業者から綿布を直接購入する場合、現金払いに限り最低価格で購入できるという内容であるが、多くの企業が原料をクレジットで購入しているため、この条件では企業にとって負担が大きいと指摘した [Volksraad 1935-36 : 1777]。

一九三〇年代、オランダ本国の綿業が蘭領東インド市場で、唯一日本製品と競争できていたのが晒綿布である。その晒綿布の主要な購入先であるバティック産業の景気の回復はオランダ綿業、オランダ系輸入業者にとつても大きな利益をもたらす。そのため植民地政府がより積極的に苦境に喘ぐバティック産業の救援に動いたといえる。ただし、法案の内容についてはオランダ製晒綿布、その輸入業者に対する配慮の方がバティック産業への配慮よりも強く感じられる。例えば、日本製未晒綿布を使用する業者については無視されている。

二. バティック産業回復の兆し

一九三六年三月以降、バティック産業には回復の兆しが現れた。この年の砂糖黍を含む農業生産が向上したこともあるが、政府による救援策もその要因になったと思われる。表5にあるように、一九三六年一月と九月を比較するとオランダ

製を中心にキャンブリックの卸売価格が七%程度低下した。

価格の低下は販売量の増加につながった。輸入業者によるキャンブリック協定によって、一九三五年三月と四月に五万五一〇ヤードのキャンブリックが販売されていたが、一九三六年の同月には一〇万四二〇〇ヤードに増加した。パティック用ロウ、樹脂の一九三六年の売り上げも前年度の同じ月よりも倍増している月があった。最終的にキャンブリックの年間使用量は世界恐慌前に近い数字となり、一九三五年の六八七五万ヤードから一九三六年は一億八〇万ヤードに増加した [IV 1939: 168] [Volkstrand 1936: 37: 886]。

晒綿布輸入制限令以降、安価なパティックへの需要が高い傾向が続いていたが、キャンブリック価格の低下、パティック需要の回復の影響で、この傾向に変化が生じた。上述したキャンブリックの消費量の増加は、特に高品質なパティックに対する需要が増加したことを意味する。これは未晒綿布輸入制限令後、設定されていた四・一ギルダーの最高価格が三六年一〇月末に廃止され、未晒綿布の価格が上昇したことで、並級、中級キャンブリックとの価格差が縮まったこともその要因として上げられる。より品質が高い製品への需要拡大はパティックの海外輸出にも明確に表れ、低品質製品が多いバタヴィアから比較的品質に優れるプカロンガンへ主要な輸元がシフトした [IV 1937: 141]。

三六年九月のオランダ本国と蘭領東インドの金本位制離脱に伴うギルダー危機の影響により、年度末には物価が上昇し、

パティック原料の価格も若干上昇した。しかし、三七年、蘭領東インドのパティック産業の状況は、世界恐慌前の一九二九年以前よりもさらに高いレベルとなり、キャンブリックの消費量は一億二九九〇万ヤードに達した [IV 1938: 146]。

IV. 一九三〇年代のスラカルタのパティック産業

一. スラカルタの特徴

一九三〇年代前半、住民の購買力の減退、安価で低品質なパティックの流行、服装の流行の変化など、パティック産業には大きな課題が存在していた。さらに三四年の晒綿布輸入制限令により、原料価格が高騰した。他地域と比較し、伝統的な製法を維持していた一大生産地スラカルタのパティック企業はこの危機にどのように対応したのだろうか。

スラカルタはソロ川流域の肥沃な平野に位置するジャワ島中部の都市である。マタラム王国の二つの王家を擁し、オランダ植民地期には王侯領として区分されていた。同じ王侯領であったジョクジャカルタと並ぶジャワ宮廷文化の中心地である。そのためスラカルタのパティックは王宮の権力と結びついたデザインを藍染めと茶色のソガ染めで製作するのが特徴であり、一九世紀後半には、ジャワに流通するパティックの主要な生産地として知られていた。スラカルタ中心部にある王宮に近いカウマン Kauman 地区などではチャンティンを用いた高品質の手描きパティックが生産されていたが、

表6 スラカルタのバティック企業数（1930）

現地人	華人	アラブ人	西洋人	合計
236	60	88	3	387

[Kat Angelino 1930b : 321]

一九世紀後半にチャップによる製法がスラカルタにも普及した。二〇世紀の初めに市南西部にあるラウエヤン Laweyan 地区が産業の中心地として成長し、ここではチャップを使用した安価な製品に特化した生産が行われていた。[Soerachman 1927:30-31] [Soekarso 1935:90] [Kat Angelino 1930b:95]。

一九三〇年、スラカルタ市は、西洋人二三三九人、現地人一二万一六四七人、華人九五八五人、その他の東洋人一三二七人合計一三万四八九九人を抱える都市であったが、

表6に示されるように計三八七のバティック企業があり、その約六一%が現地人企業であった [Volksstelling 1930:142-143]。その中で、前述したラウエヤン地区やパサル・クリウォン Pasar Kliwon 地区には普段使いの安価なチャップ・バティックを生産する企業が集中していた。三〇年代前半、これらの地域のバティック生産方法に様々な変革が見られた。チャップ作業については、二〇年代から通常、一回目の模様描き mengreng、二回目のロウ置き tembok にチャップを用いていた。しかし、さらなる作業の効率化を図るため茶染め前のロウ置き mbroni までチャップで行うようになった。染料についても二〇年代から低価格の商品に限り藍染めだ

けではなく茶染めでも合成染料を使用するようになったが、三〇年代になるとそれがさらに普及し、製作時間が短縮された。綿布についても、従来、並級キャンブリックを使用していた製品にはより安価な日本製未晒綿布を使用するようになった [Soekasno 1935 : 92-93] [Anon 1936 : 758]。

このように低価格のバティック生産においては他地域と同様に作業の簡素化によるコスト削減に取り組んではいたが、スラカルタのバティック生産の特徴は、やはり安価なバティックであってもキャンブリックの使用と天然染料の茶（ソガ）染めにある。改革を進めながらも、市場の動向を見ながら、伝統的な製法、品質に対するこだわりを捨てることはなかった [Soekasno 1935 : 100 : 104]。

スラカルタのソニテン Sonien 地区、シンゴサレン Singosaren 地区などでは高級なバティック生産が継続されていた。原料はもちろんキャンブリックを使用し、茶（ソガ）染めの染料については常に天然染料を使用していた。当時、流通していた合成染料アニリンは他地域で天然染料ソガの代替品として使用されるようになったが、重要な部分で多くの相違点がある。合成染料では短時間に布に色が入り込むため、天然製品に見られる光沢、暖かみに欠け、全体的な色調が鋭く感じられる。天然染料による染色は時間をかけて進められ、その色調は柔らかく、なめらかに感じられる。スラカルタのバティックに天然ソガ染料は欠かすことのできないものだった [Anon 1926 : 161] [Soekasno 1935 : 92]。

パティックの生産、特に高品質 *atusan* なパティック（手描き以外に一部のチャップ・パティックも含まれる）であれば高い技術、経験が必要になる。だれでもすぐに製造を始めすることはできない。他地域、特に新興のパティック生産地と比較し、スラカルタには多くの質の高い労働者と、その労働者と企業を結びつけるシステムも存在してした。

スラカルタでは、パティック生産の作業が細分化されて行われていた。パティックには綿布の準備、ロウ描き、藍染め、ソガ染めなど複雑な工程があるが、それぞれに専門の職人が存在する。特に染めの職人は評価が高く、スラカルタ以外の生産地からも注文があった。それぞれの職人に綿布を配送するコストがかかるものの、企業は自社の作業場で生産する以外に個別に外部委託して生産することができた。

また、スラカルタの大手のパティック企業では生産全体をより小規模なパティック生産者に下請にだしていた。これをサンガン *sanggan* 制といひ、サンガンとは「支える、維持する」を意味するサンガ *sangga* に由来する。請負人 *tukang nyonggo* は雇用者から綿布を受け取り、自分が手配した職人を使って製品を加工し、完成品を雇用者に引き渡していた。請負人が次の雇用主となり別の請負人を雇用することもあった。雇用主である企業は仕事を下請に請け負わせることでより多くの利益を得ている。労働場所の提供を節約できるだけではなく、請負人が通常、安価な労働力になるからである。契約によると請負人は仕上がった布を引き渡す時に賃金を得

るが、実際には仕事の依頼時に賃金も受け取っていた。この前貸し金によって、請負人はしばしば雇用主に従属する存在になっていた。不況の時期、資金難で操業できなくなった企業が請負人になることもあった。原料を用意する必要も製品を販売する必要もなくなるからである。景気が回復すると、請負人から独立した経営者になることも見られた [Soekasno 1935: 95-97; 100-101]。

こうした分業と柔軟な下請制度はスラカルタのパティック産業が発展を継続する上で有益だった。分業は長年にわたって培われた高いスキルと豊富な知識により、仕事の効率化と質の向上に役立った。下請制度は、企業にとっては景気変動の波が激しい時期、大きな資金投資を行うことなく、質の高い労働者を必要なときに必要な数で雇用して生産することができた。

二．パティック企業の組織化

スラカルタのパティック産業では多くの現地人企業が活躍していたが、パティックを生産するための綿布、ロウ、染料、銅製チャップなど主な原料の流通については、そのほとんどを華人、アラブ人商人が握り、多くの利益を得ていた。彼らは資金力があり、原料を豊富に用意することができた。輸入業者を通して綿布、染料などを購入した華人、アラブ人中間商人は、それらをパティック企業に通常、二〜三ヶ月のクレジットで販売していた。クレジットは資金力の問題がある多

くのバティック企業にとって不可欠なものであるが、その利子は高く、半年で二〇%の場合もあった。大規模なバティック企業だけが中間商人を介さず、直接、輸入業者から購入することができた。これまで現地人企業の間では、華人、アラブ人の中間商人を介さず、直接、原料を購入するための組織が何度か設立されていたが、安定的に運営することができず、短期間で解散していた。価格変動に対応する知識、団結力、資金力などで現地人商人は華人、アラブ人中間商人と比較し、不足している部分が多かったとされる^② [Vb.15-11-23-12] [Saroso 1951: 180-181] [MvO Soerakarta 1932: 255]。

一九三四年、輸入制限令による不況下、前述した日蘭会商前の植民地政庁高官との会談を終えたバティック企業家達は、綿布購入のため組合を設立する動きを再び開始した。同年、ジョクジャカルタでジャジェンカルン MDJaiengkarsu 主導による「現地人バティック企業家協会」Persatuan Pengusaha Batik Bumi Putra が設立された^③ ことにかけ、一九三五年、スラカルタでウォンソディノモ Wongsodinomo 主導による「スラカルタ現地人バティック企業協会」[Persatuan Perusahaan Batik Bumiputra Surakarta が設立された^④。その後、チルボン、プカロンガン、トゥルンアゲン、チアミス Ciamis でも同様の団体が設立された。これらの団体は、①輸入業者の団体からバティック原料を直接購入する（華人の中間商人を通さない）、②海外からバティック原料を輸入する、③バティック用の綿布、染料を生産する工場を設立する、④高利貸しから会員を救済

するため原料をクレジット販売する、⑤バティック市場の開拓と販売に努める、ことを目標にした。一九三九年四月には、スラカルタ、ジョクジャカルタ、プカロンガン（ウォノプリング Wonopringgo）、プカジャンガン Pekajangan）、チルボン、ポノロゴのバティック企業組合の代表がスラカルタで会議を行い、「バティック企業家連合」Perkumpulan Pengusaha Batik の設立を決定した。この組織は各地域のバティック企業組合を結集させたものである [GKBI 2009: 53-54] [IV 1936: 173] [IV 1937: 187]。

一九三六年、植民地政庁による救済策により、バティック産業の状況に改善がみられたことを述べたが、この改善にバティック企業の組織化も影響している。一九三四年晒綿布輸入制限令施行後、小規模なバティック企業がキャンブリック協定に参加する輸入業者からキャンブリックを購入する場合同、十分な量を手でできず、その価格も華人の中間業者が購入する価格と比べ割高になっていた。スラカルタで結成されたバティック企業組合は、輸入業者に対して、大規模な華人中間業者と同じ最低価格でキャンブリックを販売することを要求し、政庁とも交渉することで、現金払いを条件にそれを認めさせた。同様に、ジョクジャカルタ、チルボンの組合も政庁の支援を受け、必要な綿布を輸入業者から直接購入できるようにになった。[Saroso 1954: 184] [IV 1937: 166]。

一九三七年、スラカルタでは約二〇〇社のバティック企業が操業し、その二五%が五〇人以上の労働者が働く大規模な

企業だったが、一九三八年九月までに一〇八社の企業がこの組合に加盟した¹⁾。最低販売価格で輸入業者から直接、原料を購入できるようになり、これによって得られた利益は企業から労働者にも還元された。女性労働者に病氣療養中の賃金、妊婦に対する看護費を提供する制度が導入されている。スラカルタのバティック企業組合は年間約一〇〇万グルダーを売り上げ、この国の「バティック産業の一〇%を支配している」といわれるほどの成長を見せた [IV 1939: 168; 255] [MvO Soerakarta 1937: 201-203] [Saroso 1954: 167, 173]。

組織の発展と同様にラウエヤン地区のバティック企業家の伝説的な繁栄ぶりにも注目できる。「スラカルタ現地人バティック企業協会」の会長ウォンソデイノモは、スラカルタのラウエヤン地区に WS Batik という企業を設立し、一九三〇年代初頭には全国的にもよく名の知られたバティック企業家になっていた。一九三四年、日蘭会商前のオランダ代表と会談したバティック企業代表団にも加わっている。その後、この協会のリーダーとして、組織とバティック産業の発展に寄与した。植民地政庁側からもその功績は高く評価されており、植民地総督などの重要人物がスラカルタを訪問する際には、彼の工場を見学することが恒例となっている。一九三八年には総督より、オランダ女王の誕生日に与えられる勲章 *Kleine gouden ster* を現地人企業家として初めて授与された。また同じ協会の主要メンバーであったチヨクロスマルト [Jokrosoemarto] も一九三〇年代に活躍したラウエヤン

地区の大企業家である。彼は他の同業者よりも早くバティックの海外への輸出を開始したと言われ、多くの財をなした。彼が残した一八〇〇平方メートルの広大で華麗な邸宅は当時のバティック企業家の繁栄ぶりを伺わせ、現在でもコンベンションセンターとして利用されている [Batviasch Nieuwsblad 01-09-1938] [De Sumatra Post 23-09-1937] [Het Nieuws van den Dag voor Nederlands-Indie 13-06-1934] [Gunseikanbu: 209] [Forum Pengembangan Kampoenng Batik Laweyan]。

おわりに

現在のインドネシアで「民族産業」として理解されるバティック産業であるが、一九三〇年代前半、世界恐慌の影響を受け停滞していた。さらにオランダ本国の綿産業、オランダ系輸入業者ばかりを優遇するオランダと植民地政庁の政策は、安価な日本製綿布を使用するようになったバティック産業にさらなる打撃を与えた。しかし、フォルクスラートの現地人議員からの働きかけもあり、停滞するバティック産業への救援策が政庁によってまとめられた。バティック企業の方も組織化によって基盤を整え、景気の変動に柔軟に対処した。この後、再びヨーロッパで起こる大戦のため世界経済は混乱するが、バティック産業は三〇年代末まで生産量を大きく減退させることはなかった。

伝統的なバティック産地として知られるスラカルタでは、安価なバティックの生産地には負けない、質の高い労働力とそれをまとめる雇用方法を持っていた。近代的な工場生産に集中させるのではなく、多くの家内労働を結合させることで生産を維持していたことに注目できる。また長年の懸案だった原料の供給についても企業間の組合を組織することで、華人中間商人に多くの利益を奪われていた状況を一部改善できた。また、この時期、現代まで伝説が残るくらい裕福な企業家達が出現していたことにも注目できる。

高品質のキャンブリックを主な原料として生産を続けるスラカルタのバティック企業はオランダ製キャンブリックの重要な顧客でもある。オランダ本国と植民地政府の政策はオランダ製キャンブリックを保護することにあつたが、それが結果的にスラカルタのバティック企業にとって有利に働いた点も指摘しておきたい。住民の購買力が下がった時期、多くの人が最低限の衣服の量を考慮した上で安価なバティックの購入を選択する。しかし、経済状況が明るくなった時期には少しでも高品質なバティックを多くの人が望んで購入する。このことは衣服であるバティックが人々の生活に不可欠なもので、余裕があれば少しでも質の高いものを身につけたいという消費者の嗜好を示している。バティック生産地の中でもスラカルタは、伝統的な製法を維持しながら上質のバティックを生産することで、バティック生産の中心地という地位を守り続けることができたといえるだろう。

註(1) 二〇世紀前半の丁字入りたばこ産業については拙稿「赤崎

2008」[赤崎 2009]を参照。

(2) バティックに関する先行研究はその芸術性の高さに注目した文化的な研究が中心である。日本では関本が近現代のバティック産業に関する文化人類学的研究を行っている[関本 1995]「関本2000」[関本2003]。また、松尾が綿産業研究の中でバティック産業についても概観している[Matsuo 1970]。一方、バティック産業の歴史的な研究については十分な関心が寄せられておらず、特にオランダ植民地期についての歴史的記述は一九三〇年頃の報告書『バティック・ラポルト Batkrapport』[Angelino 1930a] [Angelino 1930b] [Angelino 1931]の叙述のみで説明されているものが多い。ただし、一九一〇年代のスラカルタのバティック産業についてはイスラム同盟の研究の中で白石が詳細に説明している[Shirashi 1990]。

(3) ジャワに輸入される「綿サロン類」は、①模造ジャワ更紗物②捺染物③縞物④その他に分類され、輸入量の九割を占める縞物は主に格子柄の綿布である。一九三〇年、オランダ製とシンガポールから輸入される英領インド製が中心であったが、一九三〇年以降、日本製品が急激に増加し、一九三三年、輸入額の八五・七%を占めるようになった。輸入港別に見るとジャワ島東部にあるスラバヤ港からの輸入が全体の六割ほどで、ジャワ島東部の需要が多いことを示している[南洋協会 1934a: 47]。

(4) 第一次世界大戦期、一九二〇年代の蘭領東インド市場における輸入綿布については拙稿を参照[赤崎 2020: 342]。

(5) 制限令前のある二〇枚のサロンの製造コストは、労賃合計五ギルダー(チャップ 20×4cent = f0.8、藍染め medel 20×

5cent = f10⁶ 茶染め前の脱ロウ kerok 20×3cent = f0,6⁶ 茶染め前のロウ置き mbironi 20×3cent = f0,6⁶ 脱ロウ mbabar 20×10cent = f2,0⁶、ロウ代○・二五ギルダー、綿布代四・五ギルダー、総合計が九・七五ギルダーである。販売価格は最初コディ(二〇枚)あたり一二ギルダーだったが、のちに一一ギルダーに下がった。つまり、制限令前の利益は一・二五ギルダーになる。制限令以後、綿布代が五・二五ギルダーに値上がりしたため企業の利益は○・五ギルダーとなった [Volksraad 1934:35: 456]。

(6) 未晒綿布についてのジャワの港別輸入量は、一九三三年にバタヴィア港七三・三%、スマラン港一八・一%、スラバヤ港一・八%、チルボン港六・八%であったが、一九三四年になるとバタヴィア港四二・三%、スマラン港三六・一%、スラバヤ港一二・六%、チルボン港九%になった [台湾総督官房外事課 1936: 30]。

(7) 未晒綿布のグレイ・シャーチングの価格については輸入制限令実施後、最高価格として四・一ギルダーが設定された [Algemeen handelsblad Nederlandsch-Indië 18-6-1935]。

(8) 同時期、プカロンガンでも分業が中心で、パティック製作全てを行えるような施設は少なく、ほとんどが家内労働で行われていた [MvO Midden-Java 1937: 229]。

(9) 一九〇九年、貿易会社ウイヲロハルジ³³ Wiworhardjo が綿布などを購入する目的で資本金二万五千ギルダーによって設立された。一九一一年、ドヨルメクソ Dojoroemeks³⁴ が燃料を買う目的で資本金五千ギルダーによって設立された。一九一七年頃、パティック職人達によって原料購入のためスデオトモ Sediotomo という組合が設立されたがすぐに解散した。一九二〇年にも、プディウトモのストラカルタ支部で

パティック原料を購入する協同組合の設立が検討されたが実現しなかった [Vb.15-11-23-12]。

(10) ウオンソディノモはストラカルタにある老舗パティック企業ダナルハディ Danar Hadi の創設者の祖父にあたる [Indi Achjadi 2011: 26]。

(11) 一九三八年、ストラカルタには大小約三〇〇のパティック業者がいて、大規模な業者のほとんどが「パティック業連盟」に加入していた。その組織のメンバー以外にアラブ人企業九〇社、華人企業三〇社が存在していた [東 1939: 14] [De Locomotief 09-11-1938]。

【略語】

[IV] Indisch Verslag

[MvO] Memorie van Overgave

[Vb] Verbaal

[VHNJ] Verslag omtrent Handel, Nijverheid en Landbouw van Nederlandsch-Indië

[Volksraad] Handelingen van den Volksraad, Batavia, 1918-1942

[Volksstelling 1930] Volksstelling 1930 deel II Inheemsche Bevolking van Midden-Java en de Vorstenlanden, Census of 1930 in Netherlands India, Batavia, 1934

【参考文献】

Algemeen handelsblad Nederlandsch-Indië.

Anon. 1917. "batik", *Encyclopedie van Nederlands Ost-Indië*,

Tweede druk, 's Gravenhage.

Anon. 1926. "De Batikinindustrie", *Djawa, Tijdschrift van het Java-*

- Instituut* 6-3.
- Anon. 1936. "Industriele productie in 1935". *Economisch weekblad voor Nederlandsch-Indië*, 17.
- Anon. 1937. "Industriele productie in 1936". *Economisch weekblad voor Nederlandsch-Indië*, 17.
- Batavijsch Nieuwsblad*
- De Locomotief*.
- De Sumatra Post*
- Forum Pengembangan Kampoeng Batik Laweyan. <https://kampoengbatiklaweyan.org/ndalen-fokrosoemartan/>
- GKBL. 2009. *60 Tahun Gabungan Koperasi Batik Indonesia*. Jakarta.
- Gunsekanbu. 1944. *Orang Indonesia jang terkemoeka di Djawa*.
- Het Nieuws van den Dag voor Nederlands-Indië*
- Judi Achjadi. 2011. *The Glory of Batik - The Danar Hadi Collection*. PT. Batik Danar Hadi.
- Kat Angelino, P. De. 1930a. *Rapport Betreffende eene Gehouden Enquête naar de Arbeidstoestanden in de Batikverrij op Java en Madoera, Dl. I: West-Java*. Weltevreden, Landsdrukkerij.
- Kat Angelino, P. De. 1930b. *Batik Rapport, Dl.II: Midden-Java*. Weltevreden, Landsdrukkerij.
- Kat Angelino, P. De. 1931. *Batik Rapport, Dl.III: Oost-Java*. Weltevreden, Landsdrukkerij.
- Kretschmer de Wilde, C.J.M. 1941. "Batiknijverheid", *Industrie in Nederlandsch-Indië, Bizonalen Nummer van het Economisch Weekblad voor Nederlandsch-Indië*.
- Matsuo, Hiroshi. 1970. *The Development of Japanese Cotton Industry*. The Institute of Developing Economies, Tokyo.
- Saroso Wirudihardjo. 1951. *De contingenteeringspolitiek en hare invloed op de indonesische bevolking*. 's-Gravenhage.
- Shiraishi Takashi. 1990. *An Age in Motion: Popular Radicalism in Java, 1912-1926*. Cornell University Press.
- Soekasno 1935. "Het Solosche Batikbedrijf". *Volksrechtwezen*.
- Soerabaijisch handelsblad*.
- Soerachman, R.M.P. 1927. *Het Batikbedrijf in de Vorstenlanden*. Landsdrukkerij, Weltevreden.
- Soerachman, R.M.P. 1933. "Indische Industrie". *Speciale Uitgave van De Locomotief*.
- 赤崎雄一. 2008. 「蘭領東インドにおける丁字入りたばこ産業の展開」『史学研究』二六二二.
- 赤崎雄一. 2009. 「恐慌期蘭領東インドの丁字入りたばこ産業」『東南アジア歴史と文化』三八.
- 赤崎雄一. 2020. 「植民地期インドネシアのパティック産業の成長」『史学研究』三〇五.
- 学研社
- 姉齒華平. 1932. 「蘭領東インド関税改正問題と新聞論調」『海外経済事情』三一.
- 大阪市役所産業部調査課. 1934. 「蘭印市場に於ける本邦綿布」.
- 籠谷直人. 2000. 「アジア国際通商秩序と近代日本」. 名古屋大学出版会.
- 越田佐一郎. 1933. 「織物蘭印輸入割当問題のジャワ・ボータ説」『海外経済事情』四四.
- 杉山伸也. 1990. 「日本の綿製品輸出と貿易摩擦」『戦間期東南アジアの経済摩擦』. 同文社.
- 関本照夫. 1995. 「インドネシア近代のパティック産業の事例—文化の自画像の生成—」『総合的地域研究』一〇.
- 関本照夫. 2000. 「周辺化される伝統—パティックから見るジャワの

- 近代」『民族学研究』六五一—三。
- 関本照夫、2003。「市場とコミュニティ—ジャワ・バティックとその社会的土台」、東京大学東洋文化研究所編『アジア学の将来像』、東京大学出版会。
- 台湾総督官房外事課、1935。『織物市場としての蘭領印度第一輯』。
- 台湾総督官房外事課、1936。『織物市場としての蘭領印度第二輯』。
- 東亜研究所、1943。『蘭領印度の貿易及貿易政策』。
- 南洋協会、1933。「蘭領印度に於ける晒綿布の輸入情勢により見えた輸入貿易政策の将来」『南洋協会雑誌』一九—一。
- 南洋協会、1934a。「蘭領印度に於けるサロン」『南洋協会雑誌』二〇—一六。
- 南洋協会、1934b。「蘭領印度に於ける晒綿布類の輸入制限」『南洋協会雑誌』二〇—一五。
- 東駿一、1939。「中部爪哇ソロ市バティック工業の現況」『通商彙報』三七九。
- 増田与、後藤乾一、1977。「日本・インドネシア経済関係史 研究の序説にむけて 第一次日蘭印会商前後の蘭領東インド市場における日本綿布、一試論」『社会科学討究』二二—三。
- 村山良忠、1986。「第一次日蘭会商」、清水元編『両大戦間期日本・東南アジア関係の諸相』、アジア経済研究所。
- 龍寶斉、1936。「織物より観たる日蘭印貿易」『南洋協会雑誌』二二—一九。

【謝辞】

本研究はJSPS科研費20K01013の助成を受けたものである。

(国立和歌山工業高等専門学校)